

第60回通常総会・第89回講演大会記事

第60回通常総会 第60回通常総会は、4月3日(木)、13時40分から東京経団連会館において開催された。午前中に挙行された、創立60周年記念式典の余韻が漂う会場で、田畑専務理事司会のもとに開会した。

恒例では冒頭に会長の挨拶が行なわれるが、今回は60周年記念式典で式辞として挨拶をされたので省略することとし、作井会長が議長となり直ちに議事に入った。付議された案件は次の3件で、

1. 昭和49年度事業報告、昭和49年度収支決算・財産目録の件
2. 昭和50年度事業計画ならびに昭和50年度収支予算
3. 理事、監事ならびに評議員選挙

議事進行上、初めに第3号議案理事、監事ならびに評議員選挙が行われた。選挙管理委員に近藤真一君、国井和扶君を選び、別室において開票作業に入った。続いて第1号議案昭和49年度事業報告ならびに収支決算・財産目録の件と、第2号議案昭和50年度事業計画ならびに収支予算の件とは関連しているので、一括議案として事業と会計に分けた。

昭和49年度事業報告ならびに昭和50年度事業計画については、岩村英郎理事から、過去10年を振り返りながら次の説明があつた。

60周年記念をお祝い申し上げます。

思いおこすと、50周年記念式典を挙行して以来、はや10年の才月が流れました。この昭和40年代の10年は、わが国鉄鋼業にとって、すばらしい立派な記録に埋まりました。日本鉄鋼協会も、この黄金の10年を期してか、それを迎える数年前、故浅田長平元会長の大英断と鉄鋼業界の深い理解を得て、その規模の拡大と財政の充実をはかるため、画期的な鉄鋼協会の拡大強化の方針が樹てられ、その基礎が充実しておりました。

ここに昭和49年度の事業報告書を提出し、併せて昭和50年度の事業を御審議いただくに当り、この10年の歩みを省み、来るべき10年を如何に進むべきかを探求してみたいと思います。

鉄鋼協会の会員数の推移を見ますと、昭和42年に1万人を超え、最近5年間は殆んど変動がありませんが、昭和40年当時から較べ、現在15%強ほど増え、その中でも外国会員は年々増加しており、鉄鋼協会が、日本の鉄鋼業とともに国際的に評価されていることを示していると思います。

鉄鋼協会の主要な事業である講演大会の講演数や、学術機関誌「鉄と鋼」の論文数は、混乱した学生運動による大学紛争により、昭和45年頃講演数が減少していますが、毎年毎年増加し、学術・技術の研究に大きな役割を果たしていると言えます。

また、鉄鋼協会の国際的評価に応えるため、昭和41年、Tetsu-to-Hagané Overseas(年4回発行)を、Transactions of the Iron and Steel Institute of Japanと改称し、年6回発行しました。更に昭和50年より、それを

月刊誌として発行することになりました。

企業の技術研究の交流の場である共同研究会は、現在15部会24分科会の構成になっていますが、この10年間は殆んど変わらずに常時活発な活動な展開してまいりました。特に昭和40年に設備技術部会を設け、それ以来設備メーカーとの共同研究を行うようになりました。また、昭和43年には、湯川正夫元会長の御尽力により原子力部会が生まれ、現在の原子力製鉄技術研究組合誕生の原動力となりました。

基礎研究につきましては、日本学術振興会、社団法人日本金属学会とともに、三者で鉄鋼基礎共同研究会を昭和40年に設置し、その振興を図りました。研究効率をあげるため、一部会の活動は5年以内という運営方針のもとに、今までに11部会が研究を行ないました。うち三部会は現在研究を継続中であり、昭和50年度には2部会が発足する計画です。研究を終了した部会は、報告書を出版したり、シンポジウムを開催し、その成果を広く普及しています。

その他、政府補助金を得て、国内炭活用製鉄コークス製造試験、鉄鋼中性子照射試験、ジェットエンジン用耐熱合金開発研究、排煙脱硫試験、原子力製鉄トータルシステム等の他共同研究会関係4件、基礎共同研究会関係4件、クリープ試験1件の試験研究を行ないました。この10年間の政府補助金関係研究費は第5図に示す如く、総額18億円にのぼっています。

鉄鋼協会の拡大強化に伴ない、標準化事業を確立し、鉄鋼に関するJIS原案の作成、ISO鉄鋼部門の実質的な国内窓口、鉄鋼に関するデータの収集整理を行っています。とくに、昭和45年にはISO/TC17/SC4-SC12の東京国際会議を主催しました。また、現在までに130件のJIS原案を作成しました。鉄鋼標準試料は、分析方法の発展にあわせて、機器分析用の標準試料も作成し、現在、化学分析用・機器分析用など330種の標準試料の分譲を行い、鉄鋼分析技術の向上に役立っています。

教育問題、特に継続教育につきましては、昭和40年度から技術講座を開設し、昭和43年西山記念技術講座と名を改め、年4回開催し、3年前より地方支部の要請にもとづいて年6回〜7回開催しています。また、学卒後10年程度の現場技術者を対象に、鉄鋼工学セミナーを50年度より開催することにしています。

国際交流につきましては、訪独・ベネルックス鉄鋼視察団、訪ソ学術視察団、北欧鉄鋼視察団を派遣し、スウェーデン鉄鋼視察団、ベネルックス鉄鋼視察団の来訪を受入れました。

特筆すべきことは、昭和45年数年の準備ののちに、鉄鋼科学技術国際会議を主催し、世界36カ国、1,100余名の参加を得て、盛大に挙行されました。この会議は、昭和49年、ドイツのデュッセルドルフにおいて第2回目が開催され、日本から40名が参加しました。また鉄鋼協会は昭和48年に第4回真空冶金国際会議、第4回ESR国際シンポジウムを主催し、日ソ製鋼物理化学シ

ンポジウムを定期化し、日本スウェーデン鉄鋼シンポジウムを開催する等国際的に飛躍してまいりました。

これらの事業は特別報告書として出版され、広く成果を普及してまいりました。その種類は 19 篇になつています。図書刊行については鋼の熱処理改訂版、鉄鋼製造法全 4 巻を始め、鋼材マニュアル、データシートシリーズ等を出版し、鉄鋼科学技術の普及、啓蒙も活発です。

近年、技術情報の管理が重要になつてきておりますが、昭和 48 年より情報の電算機処理のため、金属関係十学協会や JICST の協力を得て、自転車振興会補助金も得て、シソーラスの編纂を行つております。

以上、10 年間、活潑な事業を展開してまいりましたが、事務局体制も、鉄鋼業界の協力のもとに、大学卒業後数年の経験をもつた若い技術者を派遣勤務の形で受けており、事務局の強化と新鋭化に多大の効果をあげております。

過去 10 年間、鉄鋼業界には、年間 1,000 人近くの工学系・理学系の大学技術者が就職しており、今やわが国の鉄鋼技術にとりくむ頭脳集団の力は、世界の鉄鋼業を指導する力をもつものであります。

環境問題、エネルギー資源問題等、科学・技術の発展の条件に要因が加味された中で、大学と業界の間にあつて、鉄鋼協会の果すべき役割は益々多岐に亘つて参りました。ここに私共は来るべき 10 年のために、その第 1 年目である昭和 50 年度を迎えるにあたり、如何なる企画をもち、意義のある活動をなすべきか深き配慮を必要とする次第であります。

引続き、細木繁郎理事より昭和 49 年度収支決算・財産目録の件ならびに昭和 50 年度収支予算について、まず、昭和 49 年度収支決算は、収入 3 億 4,744 万 7375 円で予算に対して 2,178 万 6883 円の増収となつた。これは刊行物収入あるいは鉄鋼標準試料の大幅な増収によるものである。一方支出面では印刷費、印紙用紙代をはじめ諸物価の急激な高騰により、支出予算に対して、1,937 万 7968 円の増となつたが、幸いにして差引 240 万 8915 円の剰余金を得たので次年度に繰り越したい。

昭和 50 年度の予算については、継続研究の内容充実に重点をおき、創立 60 周年記念事業費を含め、諸物価の高騰を勘案して前年比 30% 増の 4 億 5,196 万 3915 円を計上した。また会員ならびに維持会員各位には大幅な会費の増額に対して絶大なるご理解をいただき厚くお礼を申し上げたい。50 年度の予算執行に当つては経費節減等に留意したいと考えており、会員各位の一層のご協力をお願いする次第である。と説明がなされた。事業、会計報告のあと、石原重利監事から「昭和 49 年度の事業報告ならびに収支決算・財産目録について、事業は適正、会計は正確、財産も良好に保存されている。また昭和 50 年度の事業計画ならびに収支予算は適正なものと認める」との監査の結果が報告され、満場一致をもつて議案の第 1 号、第 2 号を承認した。

続いて、先に行なわれた理事、監事、評議員の選挙の開票結果がまとまり、理事 15 名、監事 1 名、評議員 117 名の各候補者全員が当選した旨、近藤、国井両選挙管理委員から報告があつた。総会ではここで暫時休憩し、副会長、専務理事の選出のため臨時理事会が別室において開催された。再開後、作井会長から、副会長に池島俊

雄君、荒木透君の 2 名、専務理事に田畑新太郎君が当選したと、それぞれ紹介をした。

以上をもつて第 60 回通常総会を終了した。

表彰式 通常総会に引続いて表彰式が行われ、下記の受賞が表彰状と賞牌ならびに賞金が授与された。

渡 辺 義 介 賞	平 田 龍馬	
西 山 賞	五 弓 勇雄	
服 部 賞	坪 根 勝	守川喜久雄
香 村 賞	堀 川 一男	石原 重利
渡 辺 三 郎 賞	中 山 龍夫	内 山 道良
儀 論 文 賞	相 山 正孝	梅 田 高照
	松 山 隼也	萬 谷 志郎
	篠 原 忠広	戸 崎 秀男
	不 破 祐	川 和 高穂
	佐 藤 秀樹	宮 原 忍
	小 谷 野敬之	根 本 秀太郎
	松 田 昭一	岡 村 義弘
	川 村 和郎	大 坪 孝至
	森 隆	
渡 辺 義 介 記 念 賞	有 沢 源之介	有 働 功
	小 島 賢介	北 村 一郎
	栗 田 満信	佐 々 木 健二
	佐 藤 豊	嶋 田 駿作
	田 坂 鋼二	中 村 雄松
	長 谷 川 博	深 川 弥二郎
	藤 田 敏彦	山 近 純一郎
	山 本 全作	
西 山 記 念 賞	遠 藤 芳秀	岡 田 秀弥
	沖 慶雄	金 尾 正雄
	江 口 勇	邦 武 立郎
	後 藤 和弘	雑 賀 喜規
	下 間 照男	鈴 木 隆志
	館 充	西 野 知良
	堀 範 健男	養 田 実
	渡 辺 哲弥	

第 89 回講演大会

昭和 50 年度第 89 回講演大会は、4 月 4 日、5 日、6 日東京都文京区本郷 7—3—1 東京大学工学部で開催された。この大会では講演会、討論会、表彰記念特別講演会、委員会報告講演会、ジュニアパーティーが開催された。

第 89 回講演大会・討論会 4 月 4 日、5 日、6 日の 3 日間にわたり、348 件の講演が専門別 10 会場に分かれて行なわれた。部門別件数では製鉄関係 51 件、製鋼関係 87 件、加工関係 37 件、性質関係 159 件、計測・分析関係 14 件であつた。

また討論会は次の 4 テーマが行なわれた。

1. コークス性状の高炉操業に及ぼす影響
座長 中村 直人氏
2. 連鑄々片の表面性状
座長 浅野 鋼一氏
3. 大型鋼材の熱処理
座長 田中 実氏
4. 低温用鋼の組織と機械的性質
座長 荒木 透氏

表彰記念特別講演会 昭和 50 年度渡辺義介賞ならびに西山賞の各受賞記念特別講演が 4 月 4 日工学部 2 号館大講堂で午後行なわれた。

1. 鉄鋼技術の進歩発展と製鉄所の近代化
渡辺義介賞・新日本製鉄(株)常任顧問
平田 龍馬氏

2. 鉄鋼の塑性加工の研究
西山賞・東京大学教授 五弓勇雄氏

委員会報告講演会 4 月 5 日午前 10 時～12 時工学部 5 号館 51 講義室において日本鉄鋼協会機械研究委員会の研究成果報告講演会が開催された。当委員会は昭和47

年に発足し 3 年の期間で「鋼の焼もどし脆性」をテーマに共同研究がなされ、次の通り報告がされた。

1. 概要 材料研究委員会委員長 長島晋一氏
 2. 中炭素鋼の焼もどし脆性 住金 渡辺征一氏
 3. 低炭素鋼の焼もどし脆性 鋼管 山田 真氏
 4. 機器分析結果 新日鉄 井上 泰氏
- ジュニアパーティー 4 月 5 日午後 5 時 30 分より東京大学山上会議所で開催された。お茶の水女子大ギタークラブの応援を得て、歓談や歌などがあり、和気あいのうち 7 時 30 分解散した。参加者は 150 名であった。